

プロ ヴァティスト  
人文社科学研究科  
文芸言語専攻フランス語学領域

世界遺産アカデミー特別講演会

「ルネサンスとは何か」

Eiji Hattori  
28 mai 2011

Dépasser toujours ses différences et ses contradictions et réussir à faire d'une telle pluralité et diversité de nature sa plus grande force et richesse. C'est le pari plutôt fou qu'a relevé avec un très grand brio ce petit bout de planète que l'on appelle l'Europe.

Le mot même d'Europe renvoie à l'origine au mythe d'Europe, d'origine crétoise, qui récite l'enlèvement divin d'Europé. Cette légende raconte que la princesse phénicienne jouait sur le bord de mer lorsque Zeus se métamorphosa en un taureau pour la séduire et l'emporter sur l'île de Crète. Elle y aurait donné naissance à trois fils : Minos, Rhadamante et Sarpedon. Selon Hérodote, elle fut à l'origine de la dénomination d'un continent qui passe d'Asie Mineure en Crète, et de Crète en Lycie. Si elle renvoie tout d'abord selon les penseurs de la Renaissance à la grandeur de la Grèce antique avec notamment l'image de la déesse Vénus, comme un prolongement en opposition avec la Libye, l'Afrique et l'Asie, les pourtours de l'Europe s'élargissent en réalité jusqu'aux régions nordiques.

Aux confluent de plusieurs civilisations (phénicienne, égyptienne et celte), l'Europe abritera ainsi de nombreux courants de pensée, parfois même antinomiques mais qu'elle fera toujours s'assimiler et s'interpénétrer, comme par exemple l'hébraïsme et l'hellénisme et plus tard le christianisme. L'Europe assistera ainsi à la réunion improbable du Logos (logique) et de la Torah (illogique).

Cet enchevêtrement des cultures et des concepts apparaît clairement dans le zoroastrisme apparu au cours du premier millénaire avant J.-C. dans l'actuel Iran, ou bien encore dans la façon dont la pensée d'Aristote a pénétré en Europe grâce aux traductions faites en arabe au 7<sup>e</sup> siècle des

philosophes juifs et latins. L'installation de la physique et de la métaphysique d'Aristote en Occident provoqua une véritable révolution.

Plus tard au 15<sup>e</sup> siècle en Italie et au 16<sup>e</sup> siècle en France, le courant humaniste renouera lui aussi avec la civilisation gréco-latine. Considérant que l'Homme est en possession de capacités intellectuelles potentiellement illimitées, les humanistes de la Renaissance considèrent la quête du savoir comme nécessaire au bon usage de ces facultés. L'individu est libre et pleinement responsable de ses actes. On passe d'un monde dans lequel c'était Dieu qui observait l'Homme à un monde dans lequel c'est au contraire l'Homme qui observe et juge Dieu. On passe de la « communion » à la « perception ». L'humanisme se présente comme un courant philosophique qui énonce la primauté de l'humain et des lois naturelles sur les croyances religieuses et la croyance en un (ou plusieurs) être(s) divin(s). Par conséquent, l'humanisme aboutira à l'essor des sciences et à la fin de la toute puissance du religieux au 17<sup>e</sup> siècle.

Mais chose étonnante, une telle révolution des sciences humaines ne se produira pas uniquement qu'en Europe, mais partout dans le monde et au même moment. Toujours est-il que l'on passe progressivement d'un monde de l'être à un monde de l'avoir dans lequel l'Homme ambitionne de devenir le « maître et possesseur de la nature » (Descartes).

Au 18<sup>e</sup> siècle, les philosophes des Lumières marqueront le domaine du savoir et de l'art par leurs questions et leurs critiques fondées sur la raison éclairée de l'être humain et sur l'idée de liberté. De manière très générale, sur le plan scientifique et philosophique, les penseurs des Lumières voient le triomphe de la raison sur la foi et la croyance, et c'est avec eux qu'apparaît l'idée d'universalité et de la toute puissance de la raison et de l'Occident.

Un tel rapport de force s'est aujourd'hui transféré dans le continent américain, qui en nous vendant à coup de bottes le modèle tout puissant de la démocratie libérale, creuse ainsi le fossé entre les pays pauvres et les pays riches et organise la lente mais sûre destruction de notre planète et de notre humanité même.

C'est à ce niveau précis qu'intervient l'Unesco, organisme créé dans le but de favoriser la paix internationale et qui parvint à faire accepter en 2001 une charte internationale reconnaissant la nécessité des principes de pluralité et de diversité. La pluralité est une richesse qu'il faut respecter à tout prix. Les cultures naissent toujours d'une rencontre, qui est leur chance, et ce sont peut-être les mots du philosophe Arnold Joseph

Toynbee qui résumant le mieux la nécessité absolue de respecter et dépasser nos propres différences dans un monde moderne en proie à la violence et à l'irrespect : «les civilisations ont entre elles beaucoup plus de ressemblances que de divergences.»

## 世界遺産アカデミー講演会「ルネサンスとは何か」に参加して

筑波大学大学院 人文社会科学研究所

文芸・言語専攻 フランス語学領域 高橋由貴

ルネサンス (Renaissance) とは、Re (再び) -naître (生まれる)、つまり「再生」を意味するフランス語であり、日本語においてはしばしば「文芸復興」とも訳される。大まかに述べると、ルネサンスとは14世紀末に始まり、15世紀にイタリア、そして16世紀にフランスで花咲いた文明変遷のことであるが、一体ルネサンスとは、その時代のヨーロッパにおいてどのような存在であったのだろうか。「ルネサンスとは何か」-この問いに対して、ルネサンスとは実際に人間解放の輝かしい歴史であったのか、そしてルネサンスはどのように人類史を変えたのか、といった二つの問題設定から考える。

ルネサンスが意味する「再生」とは、古代ギリシア的人間観やギリシア的理性の再発見のことであり、またそれは、ヨーロッパの出自を古代ギリシアに求める風潮を意味する。紀元6世紀から紀元4世紀のギリシア的理性とユダヤ・キリスト教といういわば水と油のように背反するものが合成されたことによって12世紀から14世紀の中世ヨーロッパにおいて形成されたスコラ哲学は、ヨーロッパの中核を築き、そしてルネサンス期における宗教改革と人本主義のもととなった。そして人本主義は人間の神に対する意識を変化させ、人間は「神に見られるものから、神を見るものへ」と変化した。つまり、今まで神が主体で人間が客体であったものが、人間を中心に神が客体となり、そして、デカルトが「人は自然の主人にして所有者」と述べたように、人の価値は存在=Être (to be) から自然までを客体化する所有=Avoir (to have) へと転移したのである。このことは、レオナルド・ダ・ヴィンチが遠近法を用いて描いた「最後の晩餐」からも見て取ることができる。このように遠近法は、神さえも客体となり、確たる一点から見られた対象である人間が中心であることを示す方法として絵画に多く用いられ、たとえばいくつかの「聖母子」画を見てみると、遠近法によって背景である自然は客体化され、個としての人間の誕生を表す赤ちゃんが主体として強調されているのがわかる。しかし、ルネサンスが影響を受けたものは、このようなギリシアの再発見だけでなく、東洋美術もルネサンスに大きな影響をもたらしている。例えば「岩窟の聖母」では、背景に洞窟が描かれているが、これは、道教に基づく洞窟崇拝が導入されたことによる。そしてそれは洞窟趣味 (Grotesque) と呼ばれ、現在ではそれが派生し、「異様なもの」という意味で用いられているのである。また、ルネサンス期の絵画と日本の屏風や絵巻を比較すると、それらには一点からの視点はなく、また、背景などといった物語に不要なものは消去され描かれていないことから、遠近法が用いられていないことがわかる。また、多くの日本人がポール・セザンヌなどの印象派の絵画を好むのも、印象派が屏風や絵巻のように遠近法を絶った表現であるからと考えられる。この

ように、文化や文明は他の文化伝統と出会うことによって生成されるものであり、そして創造は、それによって開花するのである。

ルネサンスという言葉を知ると、ただ単に文芸復興という言葉やルネサンス期のいくつかの彫刻や絵画しか思いつかなかった私にとって、服部先生の講演はとても刺激的で、また、ルネサンスを多面的に考える非常にいい機会となった。古代ギリシアの人間観やギリシア的理性を再生させることがその時代においてどのような意味を持ち、またどのような効果をもたらしたのかを考えてみると、服部先生が指摘していたようにヨーロッパ人がヨーロッパの出どころを古代ギリシアに求めたことやそれがスコラ哲学に基づいていること、そして後の科学革命や啓蒙主義、そして産業革命の土台となったことが挙げられるが、私自身は其中でも特に人間の価値の変化がルネサンスにおいて大きな意味を持ち、それが人類史を大きく変化した要因の一つであると感じた。神が主体であり人間が客体であったものから、人間を中心とした神の客体化という価値の一変によって、ルネサンス期においては人間を個体として捉える人本主義が生まれたが、このような人本主義は現在においても存在する考えであり、このような考え方が消えることなく存続し続けているという意味では、ルネサンスは人類史の中で大きな役割を持っていると考えられる。また、多くの日本人がクロード・モネやポール・セザンヌといった印象派の絵画を好む理由において、印象派には遠近法が用いられず、それが屏風や絵巻の手法と一致するからといった理由にはとても納得した。自然そのものを重要視し、多くの視点から心象を描いているものを好む日本の精神は、ルネサンス期の影響を受けているヨーロッパの精神とは異なるものであり、やはりルネサンスがヨーロッパに与えた影響はそれほど大きかったに違いない。また、ルネサンス期における古代ギリシアを再発見や東洋美術の影響だけではなく、それ以後においても、例えばモネの絵画の一つである「ラ・ジャポネーズ」のように、ヨーロッパ美術が積極的に日本を取り入れた美術品を作り上げていったことから、ヨーロッパ文化は複数の異なったもの、服部先生の言葉を借用すると、水と油のように背反するものが融合することでその時代において価値のあるものを作り出し、文化や文明を作り上げてきているのだと感じた。

私自身もそうであったのだが、ルネサンスという言葉を知ると、真っ先にミケランジェロの彫刻やレオナルド・ダ・ヴィンチの絵画などが浮かび、あたかもルネサンスは多くの有名な芸術品が生み出された時代としてしか認識されていないように感じていた。しかし、それらの芸術品は「再生」の結果の残存にすぎず、ルネサンスが本当に意味するものは、そのような「形」ではなく紀元前にもさかのぼったギリシアの精神、人間の価値の変化、そして現在にもそれらが受け継がれ存在している、といったむしろ内部的で多面的なものである、と今回の講演会によって感じた。「ルネサンス」とは何か――見単純そうに見える問いかけだが、実際にはとても奥深く、そして時代を語る上で非常に重要な問題なのである。

ルネサンスとは何か—服部英二氏の講演を聞いて—

筑波大学大学院人文社会科学研究所文芸・言語専攻 1年 樋口 詩織

## ルネサンスとは

バチカンにあるシスティーナ礼拝堂、世界最大級の教会堂建築とも言われるサン・ピエトロ大聖堂は、イタリアルネサンスの盛期に建てられたものである。サン・ピエトロ大聖堂には、イエスキリストの亡骸を腕に抱く聖母マリアをモチーフとする彫刻である『サンピエトロのピエタ』があり、これらはいずれもルネサンス頂点時期の有名な芸術家のひとり、ミケランジェロの作品である。ではルネサンスとは、ヨーロッパにおいてどのような経緯を辿り、どのようなものであったのだろうか。

ルネサンス (**Renaissance**) とはフランス語で **Re-naître**、再び生まれること、「再生」の意味である。ヨーロッパの出自を古代ギリシャに求める風潮が始まる。ルネサンス以降のヨーロッパ人にとって「ギリシャ文明は、ヴィーナスのように地中海の泡から突如誕生する」ものであり、サンドロ・ボッティチェリの『ヴィーナスの誕生』はこの事を表している。オリエントの消去、ビザンツ文明さえもヨーロッパにはないとした。

## ヨーロッパ文明の生成

ヨーロッパ文明の生成は、ヘレニズムとヘブライニズムの合体に始まる。12世紀から14世紀のスコラ哲学は、ヘレニズム（ギリシャの理性）とヘブライズム（ユダヤ・キリストの信）という水と油のように背反するものを合成していた。トマス・アキナスによる神学の大成ではこの試みがなされていたのだが、その後15世紀から16世紀にかけてイタリアルネサンスが、ドイツでは宗教改革が起こり、これらの背反するものの自己解体が行われる。イタリアではロゴス（ギリシャ的理性）から人本主義を発見し、ドイツではトーラ（ユダヤ・キリスト教）から神の復帰を発見することとなった。シャネルのロゴはこの時のヨーロッパのイメージを表している。

古代ギリシャの哲学や自然科学といった学問においては、イスラームによって継承されている。8世紀のアッバース朝より、バグダッドやコンスタンチノーブルなどの都市で翻訳作業が行われた。12世紀のイタリアルネサンスはアラビアに触発され、これらの学問を発展させていった。

古代ギリシャ的理性から人本主義としての **Humanism** を再発見したイタリアルネサンスの動きは、神の視点から人間の視点へと転換していき、16世紀フランスルネサンスへと続いた。神に見られるものから、神を見るものへの変化、**Communion**（聖体拝領）から **Perception**（知覚）へと変化していったことは次に述べる **Perceptive** の誕生に表れている。

## Perspective (遠近法) の誕生

ルネサンス期には、Perspective の技法が誕生する。これは日本語に訳すると遠近法という意味である。ビザンチン様式からルネサンス様式を比べると、前者の美術作品であるイコンでは、それ自体が神を表しており、人間の視点からの情景を書いているものではない。それに対して後者の絵画である、『聖母子』や『聖母子像』などの宗教画では、人間のある一点の視点から見つめたものが描かれている。描かれる対象の外に人の視点がある、つまり描く人である主体と描かれるものである客体が成立する。Perspective は人間の視線の確立とともに個としての人間の誕生をもたらした。これに対して日本の美術において Perspective は見られない。『源平合戦図屏風』等を見ると、物語の情景を描いており、外からの一点の視点は存在していない。19 世紀の後期印象派である、セザンヌの絵画には遠近法は見られず、これは日本人から印象派の絵画が好まれる理由の一つである。

## 単なるギリシャの復活ではない

ルネサンスは、近代ヨーロッパへの布石であった、つまり産業革命に繋がった。ギリシャにおいて、テオリア (観照) ・プラクシス (実践) ・ポイエーシス (創作) という 3 つの人間活動があったのだが、知は上流階級のものであり、奴隷がポイエーシスを行うという、知識のヒエラルキーがあった。しかし、ルネサンス期には初めてこの 3 つが合体し、知識人が自然に手を付け、職人が重視された。ルネサンス以来の教会と自然科学が並存するという二重真理があったのだが、17 世紀にはついに科学が勝利し、産業革命へと繋がっていった。

また、ルネサンスの美術の面では、ギリシャの再発見のみではなく、同時に東洋美術の影響を受けている。シルクロードにおける中国人との交流によってギリシャは東洋の技術をヨーロッパにもたらした。ルネサンス期のイタリア家具において象嵌、寄木細工、引き出しの細工等を見ると、これらは中国の影響を受けていることが分かる。

## 講演に対する考え

ルネサンスとは古代ギリシャの再発見であると共に、それだけではなく、中国の美術から学んでいたことや、古代ギリシャ哲学などの発展において、イスラムとの関わりがあり、ヨーロッパ内のみだけで発展したのではないことを学んだことは、興味深かった。

講演に対する質問で、中世においてヨーロッパがイスラムの優越性を認めていないという事が話題に上がり、印象に残っている。今日西洋で発達していると思われる哲学や自然科学、医学は古代ギリシャにあった。それが直接ヨーロッパに伝わったのではなく、イラクの首都バグダードにおいて、古代ギリシャ語からアラビア語に翻訳されたということは今回の講演でも説明された。しかし西欧ではこのようなイスラムとの関わりが認めら

れていないようである。このことは、今日イスラム文明対欧米文明と言われている、アメリカとのテロ問題や、ヨーロッパでのイスラム圏移民問題といった今日の摩擦とも関わりがあるのではないかと考えた。以前学部生の時に、フランスにおけるイスラム圏の移民の問題について勉強したことがある。イスラムの異なる文化とフランスは対立し、移民排除の動きがあるというのが現状であった。この問題解決には、「相互理解」が必要だと一般的によく言われているし、自分自身でもお互い異なる文化を認め合う寛容さが必要ではないかと感じていた。しかし、実際に相互理解とはどのような方法でなされるのか、具体的なことが分からないままであった。

今回の講演を聞いて服部英二先生の『文明間の対話』を読んだが、そこには、世界の文明史が西欧一つの視点によって書かれており、ルネサンス期に中国から美術工芸をヨーロッパに取り入れたことや、イスラム文明との交流があってこそ古代ギリシャの自然科学等が発展されたことを意図的に文明史から消している。そしてこの事が世界の文明像の歪みとなっているという事が書かれている。この問題に対し、今は一つの普遍的な人類の文明史が、一つの文化の視点によるものではなく、それぞれの文化を公平に見るものとして書かれるべきだと主張されていて、それは、「少数のエリートを対象とする専門書ではなく、教科書の段階で」ということである。私たちは教育を受ける時に必ず世界史に触れる機会がある。一点の視点から書かれた文明史、歪みが残ったままの文明史がこれからも続けられていくとすれば、これまで根づいてきた優越感や差別意識などは何も変化せず、世代から世代へと受け継がれ続けてしまう。世界の歴史を知る上で必要な文明史を偏った視点から作るのではなく、それぞれの文明にとって偏りのないものとして作るという服部先生の考えは、私の疑問に残ったままであった「相互理解」の具体的な方法という問題に対する、答えの一つではないかと考えた。



ルネサンス期にヨーロッパ中世の価値観にとって代わったものは、東欧やイタリア、フランス文明の持つ価値観を融合させた、新しい創造的文化価値である。この価値観は海上の泡のように突如として現れた。またそれは神の存在価値、位置づけさえも変えてしまうほどに人々に浸透していった。

中世期の神の存在は、人類とはかけ離れた、並列不可能な存在とされていた。中世期の絵画や彫刻において神は中央に立身し、それを取り巻くのは大天使と天使たちであり、人類が描かれることはなかった。

しかしルネサンス期には絵画や彫刻に大きな変化が現れる。それは神の位置づけを人類に近付け、さらに人類と並置されて、神に対する認識の変化を見ることになる。例えば、聖母がキリストを身ごもる様子は、かつては胸から腹下部にまでわたり赤子の姿が描かれていたものが、一人の妊婦として描かれるようになる。もはや絶対的で超越したものとされていた神の存在が覆されたことを表している。

宗教改革と人本主義を内包するルネサンス期の人々の認識の変化を詳しく見ると、まず 8 世紀よりバグダッド、コルドバ、ケルーン、コンスタンチノーブル、パレルモ、トレドが大学を媒体とした文化センターとなり、つまりイスラムがギリシャの学問を継承したと言える。このプロセスが後期に拡張し、アラビアに触発された 12 世紀ルネサンスへと変遷を辿るが、それはアンダルシア、シチリア、イタリア、フランスへ伝播することになる。各地のルネサンスモードが発展し、15 世紀のイタリア・ルネサンスと 16 世紀のフランス・ルネサンスへと成長するが、この過程において、先に述べた人本主義としての Humanism、「神に見られるもの」から「神を見るもの」へと人類の神に対する位置づけが変化していく。

この変化に付随して文芸復興の活動が現れる。これが意味するのは、ルネサンスは単なるギリシャ文明の復活ではなく、人本主義と宗教革命の融合である。

人本主義と宗教革命、言い換えれば自然科学と自然倫理の融合は束の間であり崩壊は当然である。崩壊した結果の産業革命において、ルネサンス文明が大きく世界システムの変化を目の当たりにする。ギリシャ文明における人間活動の一つとされたポイエシス、つまり創作の自然分野に知識人が手をつけることになる。

神学的に高度とされる Forma(知識)と低度とされた Materia(物質的)が混ざり、それはレオナルドやミケランジェロといった文化的巨人の誕生につながる。結果、デカルトが言うように、人の自然への立ち位置さえも変化することになる。つまり「あたかも人は自然の主人にして所有者」。

これは科学の目で見れば自然を客体化し、産業の目で見れば人間を数量化しているといえる。科学革命がヨーロッパに起きた結果である。

「個としての人間の誕生に平行して神をも客体化したルネサンス」が、今回の講演の答えだと考える。

今回の講義をうかがい、あらゆる芸術の面で横につながり合い、影響しあうのがルネサンス文明の特徴と思われた。ルネサンス期には宗教面、絵画・彫刻面等の多様な芸術形態の変容が見られるが、今回の講演で題材となった絵画に並んで私が注目しているのは音楽である。

ルネサンス期と懐古時代に挟まれる、つまり 1600~1700 年代に音楽も大きく変化した。当時の音楽は、ポルトガル語の barroco を語源とし、当時の建築物を指す語から転じてバロック音楽と呼ばれるが、イタリアを起点として新しい音楽を確立していく。ルネサンス期のギリシア歌劇研究に基づく誤った復元がバロックオペラを創造し、それが様々な点でバロック音楽の特徴を端的に示している（モノディ形式など）のは注目すべき点である。一方、対位法から機能和声へ、声楽優位から器楽中心へ、新しい楽曲形式等への移行という音楽内的変化と、市民階級の台頭、楽器の改良、音楽家の地位等の音楽外的変化に着目すると、類のない大きな変化を担った時期だとも言える。いずれもルネサンス（あるいは中世）と近現代を関係づけるための重要なヒントかも知れない。

## 人類史におけるルネサンスの意義

筑波大学人文社会科学研究所

文芸言語専攻フランス語学領域2年

益子優介

2011年5月28日、東京竹橋のパレスサイドビルで、世界遺産アカデミー主催の講演会が催された。講師は麗澤大学客員教授の服部英二先生で、演題は、「ルネサンスとは何か」であった。以下に講演の内容を要約する。

### 《要約》

通常、学校教育で教えられるルネサンスとは、古代ギリシア的な人間観、ギリシア的な理性がルネサンス期に復活したというものである。この当然の帰結として、ヨーロッパ文明はギリシア文明を継承しつつ、キリスト教を取り入れることで成立したと考えられる。しかしながら服部先生は、ヨーロッパの起源として、地中海のフェニキア文明、クレタ島のミノア文明そしてこれらの母であるエジプト文明、また元々ヨーロッパに広く先住していたケルト人のケルト文明を挙げている。つまり西洋文明は、異種混交の文明であり、純粋にヨーロッパ独自の文明ではないのである。そして服部先生は、このヨーロッパの純粋性が叫ばれたしたのは、ルネサンスからであるとしている。ではどのようにして西洋文明は成立し、ルネサンスは人類史においてどのような意味を持っているのであろうか。4世紀、ローマ帝国がキリスト教を国教とし、それによってキリスト教は西洋世界に広まっていったが、このキリスト教的世界観をギリシア的な理性で説明しようとしたのが中世のスコラ哲学である。またスコラ哲学は、レコンキスタ運動によってイスラーム世界からもたらされたアリストテレスの自然学と形而上学を基盤としている。つまりユダヤ教の不条理な世界観をギリシア的な理性によって説明しようとしたのがスコラ哲学なのである。しかしながら、不条理な世界を論理的に解釈しようとすること自体無理であり、そのようなキメラ的な状態は、二重真理説を経て自己解体していくことになる。すなわちルネサンスと宗教改革は、中世においてキリスト教の下にキメラ的に結合していた理性と不条理が再び自然科学と宗教に解体していく過程なのである。しかしながらルネサンスには古代ギリシアにおいては見られなかった独自性が存在する。それは、人間が自然を観察するがごとく神を客体化して見るという価値の転換とギリシアにおいては卑しいものとされていたポイエーシスがテオリア、プラクシスと合体したことである。したがってルネサンス期に生み出された諸芸術は、この価値の転換を3つの合体によって具現化したものなのである。たとえば、それまでのイコンとしての聖母子像には、子供のキリストがマリアの体の内部に描かれていたが、ルネサンス期ではマリアがキリストを抱くような形で描かれている。すなわち、より写實的に描かれているのである。またルネサンスの画家ジョバンニ・ベリーニの「聖母子像」の背景には遠近法が用いられているが、これは主体としての画家が自然

を客体化して観察していることを意味するものである。さらに服部先生は、ルネサンスにおける東洋美術の影響にも言及している。レオナルド・ダヴィンチの有名な「岩窟の聖母」は、洞窟の中に聖母子が描かれているが、これは中国の山水画が影響しているという。

このように文化、文明は互いに影響し合っており、それは古代ギリシアとキリスト教の融合としてのみ語られるルネサンス美術においてさえ見受けられる。

#### 《コメント》

服部先生が述べられたルネサンスと宗教改革における古代精神とキリスト教精神の分離に関してトレルチが社会的側面から興味深い分析を行っている。トレルチによると、ヨーロッパ世界の根底には、現世的生活や自然をより高次の世界の下に従属させようとするキリスト教的禁欲と創造する意識、あらゆることがらに問題を提起してやまない普遍的思惟伴った古代精神が存在しているという。そしてこの2つの基盤は、西洋世界がキリスト教を導入してから形を変えて結合、対立を繰り返しているとトレルチは述べている。中世ヨーロッパでは、古代精神とキリスト教は教会の下で統合されており、したがって自然神学と啓示神学、自然的・合理的倫理と超自然的・ sacramental 倫理、自然的道徳法とキリストの立法および教会法、現世的生活と修道士制度、帝権と教会は密接に関係していた。このような2つのものの結合は、政治的、社会的な生活がある一定の段階に維持されていたために可能であったものである。しかしながら、市民生活が向上するにつれ、教会の倫理から生活に实际的方面が独立しはじめ、俗界の国々も教会の支配を甘受するつもりはなかったため、統合されていた古代精神とキリスト教ははっきりと分裂するに至ったのである。またこの古代精神とキリスト教の分裂はルネサンスと宗教改革が目標とする人間像にも反映されている。ルネサンスと宗教改革はともに現世を肯定するものであるが、前者における人間の理想は、支配権力と関係を取り結んだり、自ら支配権力を略奪したりすることによって、多方面に自我を展開することができる自由な無職業人である。それに対して、後者のプロテスタンティズムが生み出した人間像は職業人や専門人である。そしてこのプロテスタンティズムが理想とする職業人は、キリスト教の超現世的精神が職業というありふれた現世的形式に現れているという現世肯定の思想を反映したものである。このことから、ルネサンスは、中世において統合されていた2つの要素の内のギリシア・ローマ的な古代精神を引き継ぐものであり、宗教改革はユダヤ・キリスト教的禁欲を踏襲するものであることが分かる。トレルチはさらに、ルネサンスと宗教改革に分裂した2つの要素が啓蒙主義と新プロテスタンティズムにおいて再び融合したとしている。啓蒙主義は、ルネサンスが創造した自然科学、あるいは此岸的楽天的精神と結び付いているために、古代精神を引き継ぐものと考えられやすい。しかしながら啓蒙主義には、ルネサンスの貴族主義的寄生的側面は存在せず、それに代わってプロテスタンティズムが持つ民主主義的、功利主義的社会形成力が存在している。そして19世紀に入り、様々な形に2つの要素はまた分裂したという。

このように、服部先生がおっしゃったギリシア的精神とユダヤ・キリスト教精神は、ヨーロッパの根底に対立、融合しつつ流れているのである。この2つの要素を鑑みると、(西洋化した)現代社会は、明らかに古代的精神に貫かれているように思われる。このことに関して是非を論じようとは思わない。しかしながらトレルチは、古代的精神が強くなると、人間はたましいの平安を得るために、キリスト教的禁欲を呼び戻し、自然を超越した偉大なる彼岸へと眼を向けると述べている。